

TS（トータル・サティスファクション）を目指して M21

「学ぶ喜び」を得るために

校長室担当より

本校ではありませんが、学校の定期テスト等で成績が振るわなかった生徒を「できない」生徒と位置づけ、懲戒的な学習指導をすることが過去の一部の学校においてはありました。これは間違いです。あくまでもその時は失敗したというだけで、「できない」生徒と決めつけることはできませんし、学び方を含めた何かを知らなかったために間違えた、あるいは失敗したというだけであって、決して能力がないのでもありません。学校でも会社でも評価は求められますが、低い評価が出た場合にこれをもって本人の「努力不足」とか「力がない」ということにはつながらないのです。むしろ、学校の教員や職場の上司という立場であればなおさらですが、自分たちの指導・支援に問題あるいは、工夫の余地があるのかもしれないというスタンスで、自己改善に向かっていくべきだと考えています。

かつて自分たち大人が育ってきた環境では、何かにつけ他の人と競争する意識を植え付けられてきていて、「学びは試練を乗り越えてこそ・・・」といった考え方を持つ方が今でもいらっしゃると思います。しかし、何を学ぶにしても、新しい知識や技術を身につけたり、学んだりする時に感じる喜びは必ず存在します。そもそも人間はそういうものなのです。もし学ぶことを苦痛に感じることがあるとしたら、それは学び方が本人に合っていないか、今までの本人の経験から学びへの先入観に問題を抱えてしまっていたりすることがほとんどです。こういう生徒がいた場合には、補習と称して強制的に一律の課題をさせるなどの手立てでは改善に向きません。逆に学びに対する苦痛度を上げてしまうばかりです。そうではなく、一人一人の生徒について、過去の経験に照らしてどこに学習苦痛のタネがあるのか、学習定着度や性格に照らしてどのような学び方が合っているのか、価値観に照らしてそもそも学ぶ目的を意識できているのか、といったことを対話で丁寧に見とり、本人と一緒に改善に向けてアプローチしていくことが私たちの果たすべき役割です。これを果たすことで、「学ぶことは楽しい。たとえ今は大変でも、あきらめなくて取り組めば自分は成長できる。」と生徒は感じるようになると信じて支援をしていきましょう。（令和7年6月20日）